

館内にある田澤義鋪関係書籍(販売可)



田澤精神の伝道師ともいべき永杉喜輔先生によって書かれたもので、田澤先生を理解する上で貴重な手引書である。日本の進路と青年の明日に熱い想いを抱かれる多くの方々にご一読を勧めたい。ともに手をたずさえて、この激動の社会を切り開きたいと思うからである。

田澤義鋪記念会 河村芳邦



本書は、田澤義鋪記念会の依頼を受け執筆したもので、田澤の業績をなるべく広く世に伝えたいとの趣旨からである。中略

明治以後真に尊敬に値する人を三人をあげよと云われるならば、私は躊躇することなく、福沢諭吉と新渡戸稲造と、この書の主人公である田澤義鋪とをあげるであろう。その中から特に一人をと云われるならば、私は敢えて田澤義鋪の名をあげたい。

下村湖人



本書は、田澤義鋪の直筆「地域と青年『道』」を表紙とした田中寿義雄氏協力のもとできた、最も新しいものである。特徴としては、会話が長く記載されており、親しみやすくなっている。

一時鹿島で「道の会」が発足され、田澤の業績や精神を学ぶテキストとして用いられた。田澤を学ぶうえで、たいへん参考になる一冊である。



田澤は永遠無限を見る 田澤記念会 安積得也  
昭和57年11月24日は田澤義鋪先生の三十七回忌です。今回は田澤先生のお身内の方からお話を承りたいという会員一同の熱望に沿って、先生の御次男河野義克氏から貴重な講演「父 田澤義鋪と親しかつた在天の人々」を伺いました。父からばかなことを引き受けたものだといって、しかられると思うのですが、皆様の田澤観の参考資料としてお考えいただければ幸いです。



この漫画本は(財)明るい選挙推進協会発刊の『私たちの広場』2009年5月306号～2010年3月311号に掲載されたものです。

田澤先生の政治教育運動は、明るい選挙推進運動に受け継がれています。

漫画になっていて、文字離れの若者にも田澤先生を理解できる。

館内にある資料の一部



田澤義鋪略年譜

西暦	年号	年齢	内容
1885	明18		7月20日に佐賀県藤津郡鹿島村大字高津原に田澤義陳の長男として生まれる。
1889	明22	4	鹿島尋常小学校に入学 (登校黙認、翌年正式に1年生として認められる。)
1896	明29	11	佐賀県立佐賀中学鹿島分校に入学(翌年鹿島中学校となる)
1901	明34	16	9月:第五高等学校(熊本)に入学(退学事件起こる)
1902	明35	17	9月:後藤文夫らの復学運動が効を奏して復学。
1905	明38	20	9月:東京帝国大学、法科大学政治学科に入学。
1909	明42	24	7月:同校卒業、11月:高等文官試験合格。
1910	明43	25	4月:静岡県属 8月:安倍郡長となる。
1911	明44	26	2月:横尾洋子と結婚。
1914	大 3	29	3月:蓮永寺に日本最初の青年宿泊講習会を開く。
1915	大 4	30	7月:内務省明治神宮造営局書記官 兼内務書記官に任じられる。 総務課長を命ぜられる。
1919	大 8	34	6月:神社局第一課長を命じられる。 欧州出張を命じられたが母親病気の為中止。 10月:神宮造営に青年団の奉仕を提案し、大成功を収める。
1920	大 9	35	11月:財団法人協調会常務理事に就任。
1921	大10	36	2月:協調会主催第1回労働者講習会を開く。 8月:財団法人日本青年館創立理事となる。
1922	大11	37	10月:第4回国際労働会議に労働代表として出席。 欧米各国を視察して帰国。
1923	大12	38	9月:関東大震災・罹災者救援にあたる。 10月:政治教育運動を起こし、新政社を創立。
1924	大13	39	1月:雑誌「新政」創刊。 5月:静岡県第三区の青年層に推されて無所属で 衆議院議員選挙に立候補、理想選挙を戦って次点。 8月:協調会理事辞任。 10月:東京市助役に就任。大日本連合青年団結成、理事に就任
1925	大14	40	4月:大日本連合青年団発団式、第1回大会を指導。 10月:日本青年館開館式記念講演、演題「道の国日本の完成」
1926	大15	41	1月:新政社から雑誌「大成」を発行。 6月:東京市助役を辞任。 7月:大日本連合青年団常任理事就任。
1927	昭 2	42	8月:選挙肅正同盟会を創立。
1929	昭 4	44	2月:壮年団期成同盟を創設。
1930	昭 5	45	3月:「青年団の使命」を出版。 11月:「青年団について」天皇にご進講。
1933	昭 8	48	2・3月:2回にわたり「非常時局と青年団」について両陛下にご進講。 5月:洋子夫人逝去。 12月:貴族院議員に勅選。
1934	昭 9	49	11月:大日本連合青年団並びに 日本青年館理事長に就任。 福元節子と再婚。
1935	昭10	50	5月:選挙肅正中央連盟結成。 6月:新政社解散。
1936	昭11	51	2月:廣田弘毅内閣に入閣を求められたが辞退。 4月:大日本連合青年団理事長辞任。
1940	昭15	55	2月:第75帝国議会において、 齊藤隆夫事件等について質問演説。
1944	昭19	59	3月:四国善通寺の講演で敗戦必至を予言、 講演中脳溢血の為倒れ、同地で療養。 11月24日逝去。同日正五位勲二等に叙せられ、旭日重光章を授けられる。 12月3日:東京青山斎場で葬儀、空襲下の多摩墓地に埋骨。

一般財団法人

田澤記念館

～ 全国青年団研修所 ～



昭和59年(1984)4月15日 落成

所在地 849-1311  
佐賀県鹿島市大字高津原434番地

電話・FAX  
0954-63-1622

E-mail tazawa@po.asunet.ne.jp  
HP http://tazawakinenkan.jimdo.com

規模	
敷地面積	1305.14㎡ (駐車場14台収容可能)
建物構造	2階鉄筋コンクリート 311.5㎡
1階	・事務室 ・調理室 ・市連合青年団事務局 ・小会議室(12.5畳) ・浴室、管理人室
2階	・小会議室(10畳) ・大会議室(60～70名) 展示コーナー



総工費 6,140万円  
・日本船舶振興会 2,500万円  
・県補助金 500万円  
・市補助金 1,000万円  
・募金 2,140万円



「旧田澤邸」解体 昭和58年(1983年)10月4日



明治18年(1885)7月20日生  
 ~昭和19年(1944)11月24日没 享年59歳  
 三大事業  
 ①社会教育(青年教育)青年団の父  
 ②公明選挙運動 ③労使協調運動

鹿島市城内で父・義陳と母みすとの間に長男として生まれた。  
 4歳で鹿島小学校に入学。旧制鹿島中学校(現 鹿島高校)、旧制第五高等学校(現 熊本大学)を経て、東京帝国大学法科大学(現 東京大学)に入学。

明治42年(1909)卒業し、高等文官行政科合格。内務省に入省する。  
 明治43年(1910)静岡県の安倍郡へ出向し郡長に任命される。25歳の若さであった。

静岡県安倍郡で郡長の任にあった田澤は、地方農村において、学校教育とは無縁で教育的に見捨てられている勤労青年に注目し、教育・自己修練の場を与える活動を展開した。

田澤は青年団の指導にあたり、自らも受講者と寝食を共にする、蓮永寺宿泊講習会など実施した。

大正4年(1915)、内務省明治神宮造営局総務課長となった。田澤は明治神宮造営に、地方青年団の労力奉仕を提案したが受け入れられなかった。そこで、ごく少数の青年を試験的に用いることで折り合いが付き、大正8年(1919)安倍郡青年団に呼びかけ着工した。規律ある生活と真面目な仕事ぶりで青年団の評価は高く、青年奉仕団の募集が発表されると、全国各地から青年が集まった。日中は労働、朝夕は田澤を中心とした講演や修養的諸行事を行い、全国の青年団運動の端緒となった。現在「神宮の森」として知られる木々は造営時に全国の青年団が苗木を持ち寄って植えられたものである。

大正9年(1920)、内務省を辞め、財団法人協調会常務理事に就任し、労使協調運動に尽力し、労働者講習会を各地で開く。

大正11年(1922)ジュネーブでの第4回国際労働者会議に労働者代表として出席。

大正13年(1923)政治教育を目的とする新政社を創立し、月刊誌「新政」を発刊、その第4号で「選挙肅正の機関を作れ」の論文を発表し、理想選挙の必要を提唱した。同年、実施の衆議院選挙に静岡県の青年たちから強い要請で立候補し、理想選挙運動を展開したが、次点で落選。

同年10月、東京市助役に就任。財団法人日本青年館の建設にあたった。

大正14年(1925)財団法人日本青年館開館式において『道の国日本の完成』と題する記念講演を行う。

昭和元年(1926)東京市助役を辞任し、日本青年館および大日本連合青年団の常任理事、昭和9年(1934)理事長に就任、昭和11年(1936)まで努めた

青年団綱領(大日本連合青年団)

- 1 我等は純粋なり 青年の友情と愛郷の精神によりて団結す
- 2 我等は若し 心身を修練し勤労を楽しみ自主創造の人たるを期す
- 3 我等は希望に燃ゆ 清新の意気を以て愛と正義のために奮闘す
- 4 我等は国家を愛す 忠孝の本義を体し献身奉公国運の進展に尽す
- 5 我等の心は広し 人道の大義に則り世界の平和と人類の共栄に努む

昭和8年(1933)貴族院議員に勅選された。(絶対的平和主義者)

昭和5年(1930)、昭和8年(1933)の二度にわたり青年団について天皇陛下にご進講。

昭和11年(1936)、2. 26事件後に発足した廣田弘毅内閣に、内務大臣として入閣を求められるも政治信念とは相容れぬため固辞。その後、大日本連合青年団理事長を辞任。

昭和19年(1944)、香川県善通寺市での「地方指導者講習協議会」での講演中、脳出血で倒れた。

下村湖人の著による田澤義鋪を紹介した「この人を見よ」が昭和29年(1954)発刊され、また、昭和41年(1966)には田澤義鋪顕彰会が発足し、レリーフ像が建立された。また、昭和59年(1984)に佐賀県鹿島市城内の生家に「田澤記念館」が設立された。

(鹿島市史資料編第4集『鹿島の人物誌』1987より抜粋、一部改変)

田澤記念館事業

○目的

- 1 青年団・青年活動の振興及び育成
- 2 田澤精神の現代的啓発と研修事業の促進
- 3 青年による地域づくり人材育成の充実

田澤少年クラブ

郷土の偉人田澤義鋪先生は、人類の平和・人としての正しい生き方を全国民に訴えました。また、「全国青年教育の父」と言われ、青年教育に一生をささげました。田澤少年クラブは、「国家の繁栄は先ず家庭や地域から」という根本思想を基調としながら、多くの仲間と心をつなぐに合わせ、明るく楽しい活動を通して、ふるさと鹿島の力となる人づくりを目指しています。

活動日 毎月1日～2日  
 対象者 鹿島市内児童(小3以上)



**館内研修**  
 館内での講義や体験を通しての田澤学習  
 ・平野重徳会長による講義  
 ・各自一事貫行を発表



**館外研修**  
 館外での体験を通しての研修  
 ・絵付け体験  
 ・多久東原庵舎での宿泊研修等

ユースカレッジ

田澤義鋪先生の精神と異業を学び、生活のあらゆる場面に活用実践することを目標にしている。館外研修では市内外(他県)の異業種及び文化施設等に赴き、視野を広くして自己の任務に対する心構えをあらためて認識することをねらいとしている。

研修期間 6月～3月 毎月1回  
 対象研修生 鹿島市内企業職員及び市役所職員



**館内研修田澤学習**  
 田澤の言葉や会話から、田澤の考え方に触れ、今の自分と重ねることで、田澤精神を理解し、これからの生き方を話し合う。

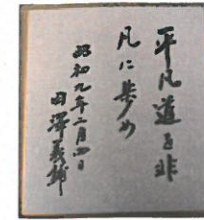


**館外研修「体験学習」**  
 玄海エネルギーパークでは、原子力発電の有無について現場を実際に見たうえで、考えることが出来た。少年自然の家では初めての体験である飯盒炊飯や夜の懇親会で交流を深める。テーマを決め互いの意見交換を行う。異業種で歳も違うのでおもしろい交流会ができる。



座右の銘

「平凡道と非凡に歩め」



平凡道⇒人間の生活に毎日必要な当たり前のこと  
 非凡⇒それを当たり前でなく人一倍念入りにやる  
 その積み重ねが非凡な結果として実を結ぶのであって、一挙に非凡なことができるのではない。

「虚空に矢を射る」

「どこへ届くのか、何に当たるのかももちろん私にも分からない。的のない虚空に向かって、放っている矢は、社会と時勢と祖国と人類と、そして大なるものが必要とするなら、必ず拾い上げて利用してくれるであろう。どんなに小さな力でも、たとえそれが善であれ悪であれ永遠に無限に繰り返される積み重ねられる時、そこに絶大な結果が与えられるであろう。」(昭和2年6月10日(渡満船中で))



つかみどころがないほどに大きな理想を目指すという気概を込めたのだろう。いつ届くとも知れない矢だ。自らの功名心や実利を求めたのではなかった。目に見える効果がないからといって失望しないし、運動を無意味とも考えない。徐々に浸透し、いつか必ず効果が現れることを信じている。

「一事貫行」

山下信義氏が提唱した言葉で、青年教育の修養方法。何か一つのことを、365日必ず実行し通すことに努める。

「郷土と錦で飾れ」

「錦を着て郷土に帰ることを願うまえに、先ず郷土を錦にすることを願え。」「国家を論ずるまえに、先ず理想郷土の建設を通じて具体的に国家に奉仕し、その盤石の固きに置け。」

錦を着て郷土に帰る人が幾人あっても郷土は依然としてぼろを着なければならぬことが多い。今後の日本が切に求めているのは断じてそうした立身主義者ではなく、じっくり腰を郷土に落ちつけ、郷土そのものを錦するという念願に燃え、それに一生をささげて悔いない青年、こうした青年を輩出してこそ真に輝かしい生命の力にあふれるのである。

四	三	二	一	貴く生きん
貴貴希来一た求	わ世道尊国東	辱信相胸努額	わ自光雲月夕	田澤義鋪
生く望れ路ため	が界義きぞ海	悪条愛に力に	人然に流光べ	
生の遙たけよ	民のす日祖の	の高のたの汗	人の大れ木し	
きき光かどばさ	族闇た本神浜	世く情た飲の	生靈気ゆのず	
んん仰にら開ら	のをれ道の日	を炬世う喜し	を気澄く間け	
ももぎ永んくば	使照ての開の	照とをる君ず	思身む黎も	
ろろつ遠わ向与	命ら混国き出	ら燃救万知く	うにと明る	
ととつのが上え	なす沌てず	さえう斛るな	かうこの	
もも友のら	れこの	なてのやす	なける	
にによれ	そ	らん	て	